南九州地域科学研究所所報
第24号（2008）41～64頁

鹿児島市立小学校における管楽器教育の可能性（２）

Possibility of Wind Instrument Education in
Kagoshima City Public Elementary School (2)

鹿児島女子短期大学　新　村　元　植
鹿児島市立田上小学校　福　留　健　之

はじめに

平成17年に南九州地域科学研究所所報第22号で実施した「鹿児島市立小学校における管楽器教育の可能性」で実施した研究では、小学校音楽授業における管楽器導入授業の事例を研究した。前回は基礎研究として導入する側、すなわち鹿児島市の公立小学校に勤務する音楽担当の教諭に対してその利点や問題点を明らかにすると共に、音楽授業においてはどのようなプロセスで管楽器を導入することが出来るかを、鹿児島市立八幡小学校における管楽器導入授業の先行事例をとおして研究した。

前回の鹿児島市公立小学校の音楽担当教諭へのアンケートでは、特別活動としての管楽器導入、すなわち授業時間外の器楽演奏活動は吹奏楽、金管バンド等の活動を実施していることがわかった。(註1) そして管楽器を導入した授業は、現在の年間可能授業数が50時間程度の現状において、授業時間内の活動として管楽器のみをを使用した授業は考えにくいのが現状である。しかし前回のアンケートにおいて現場の教師は、機会があれば授業に管楽器を導入することによりさらに充実した、児童の興味関心を引き出すことが出来る授業の可能性があることを示唆していた。このことにより、今回は米国での先行事例や鹿児島市立田上小学校で実施した管楽器導入授業を提案してみたい。

１　器楽における管楽器教育の根拠と必要性

学習指導要領 (註2) では、特色ある教育や特色ある学校づくりが強調されている。これは学習指導要領の第１章総則の第１「教育課程編成の一般方針」１で「…学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」と提示されている。また、教育課程審議会の答申 (註3) では、音楽科の課題として「感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセスを働かせる力、生涯にわたって音楽に親しみ、音楽文化のよさを味わったり、生活や社会に生かしたり豊かにしたりする態度の育成が求められている。」とし、その改善の方向性として「表現や鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を持ち、感性を働かせて音や音楽を感じ取り、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成し多様な音楽及び音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくみ、豊かな情操を養う指導が一層充実して行われるようにする。」としている。これは各学校や子どもたち

の実態に応じた弾力的指導を進めることで、音楽を愛好する心情や音楽に対する豊かな感性を育てることが可能であるとしている。そして子どもたちが音楽活動を通して、身につけた音楽的な能力を自由に発揮して行ける環境を整えることが、学校生活を明るく楽しいものにし、「生きる力」実現が期待出来るとしている。(註4) また、学習指導要領の小学校「音楽」では、ハーモニカ、オルガン、リコーダー等の具体的な学習するべき楽器名が無くなり、低学年では「身近な楽器」、中学年では「旋律楽器及び打楽器」と示されている。このことにより音楽授業におけるさらなる弾力的な器楽の運用が可能であり、学校独自のより特色ある教育活動が展開出来ると考えられる。

2 米国における管楽器教育の事例

1994年に発表された「全米芸術教育標準」(National Standards for Arts Education) (註5) は、日本の学習指導要領と比較してその拘束力は弱いが、米国における初の公的な芸術教育の標準指標として教育現場で用いられている。さらにこの全米教育標準を基に全米の各州、各都市ごとの教育部局が「芸術標準」(Arts Standards) 設置している。そして米国における芸術教育 (Arts Education) は舞踊 (Dance)、音楽 (Music)、演劇 (Theatre)、美術 (Visual Arts) に分類され、日本の学習指導要領と比較して教科的指導に重点を置いていることが特徴的である。音楽では、幼稚園年長－第4学年 (K-Grade 4)・第5学年－第8学年 (Grade 5-8)・第9学年－第12学年 (Grade 9-12) のシークエンスにおいて、9分野の「内容標準」(Content Standard) にそれぞれ分野ごとに「達成標準」(Achievement Standard) が示されている。以下に全米芸術教育標準の内容標準のみを示す。これは内容標準により学ぶべき知識と技術を明確にした標準を示し、達成標準は各学年区分ごとのさらに明確な知的ゴールを示したものであると言って良い。

Content Standard #1: Singing, alone and with others, a varied repertoire of music
〔様々な分野の音楽を個人または他の児童と歌う〕

Content Standard #2: Performing on instruments, alone and others, a varied repertoire of music
〔様々な分野の音楽を個人または他の児童と楽器で演奏する〕

Content Standard #3: Improvising melodies, variation, and accompaniments
〔旋律や変奏、伴奏を即興演奏する〕

Content Standard #4: Composing and arranging music within specified guidelines
〔具体的な指導指標に沿った作曲と編曲〕

Content Standard #5: Reading and notating music
〔音楽を読譜し記譜する〕

Content Standard #6: Listening to, analyzing, and describing music
〔音楽を鑑賞し分析し、説明する〕

Content Standard #7: Evaluating music and music performances
〔音楽を評価し演奏する〕

Content Standard #8: Understanding relationships between music, the other arts, and disciplines outside the arts
〔音楽と他の芸術、芸術外の教科との関連性を理解する〕
Content Standard #9: Understanding music in relation to history and culture
〔音楽における歴史と文化の関連性について理解する〕

米国における音楽授業は、ニューヨーク市を例にすると日本での音楽授業に相当する総合音楽授業（General Music）の他に合唱・声楽（Choral / Vocal）、器楽（Instrumental Music）に細分化され、ほとんどの小学校では中学年から児童が希望するコースを選択することが出来るシステムになっている。本論のテーマである器楽に注目すると、内容標準では＃２、＃３が器楽を直接説明している。このように米国では音楽の表現領域が重要視されており、器楽は音楽を表現する明確な位置付けを与えられ、具体的な音楽授業として確立されている。本論では2007年４月から５月にかけて訪問した、ニューヨーク市クィーンズ地区の第234小学校、モセラ（Mr. Christopher Mosera）先生の音楽授業と、同じくクィーンズ地区のフランク・シナトラ芸術学校の器楽クラス（授業）を考察する。

１）第234小学校

米国の音楽教師は大学での専攻により声楽と器楽の教師に分けられる。音楽授業も総合音楽以外は声楽（合唱）と器楽（主として吹奏楽やオーケストラ）を教えることになる。2007年４月に訪問したニューヨーク市クィーンズ地区第30地区第234小学校は、幼稚園年長から第５学年まで653名が在籍するニューヨーク市では中規模の小学校である。この小学校の音楽教師であるモセラ先生は、器楽（ピアノ専攻）の先生である。授業は表１に示すとおり、フルート、クラリネット、サキソフォーン、打楽器、金管楽器の授業を担当している。そして吹奏楽の授業も担当している。このように器楽を担当する教師は、全ての管楽器を教える必要がある。児童は第３学年までの総合音楽（General Music）の授業を受けた後、第４学年から管楽器の選択授業を受けることが出来る。受講を希望するする児童は、第４学年と５学年の児童から生活態度を含む成績が上位の児童が受講でき、児童の希望者が多いクラスは楽器数の関係で抽選になる。また、管楽器およびバンド（吹奏楽）クラスは第４学年と５学年の混合クラスである。児童のレベルは初心者ではあるが、年度の終了時期であったため全員のアンサンブルがある程度可能なレベルであった。写真１は水曜日４時間目のサキソフォーンクラスである。写真左がモセラ先生で、右は教育実習生である。

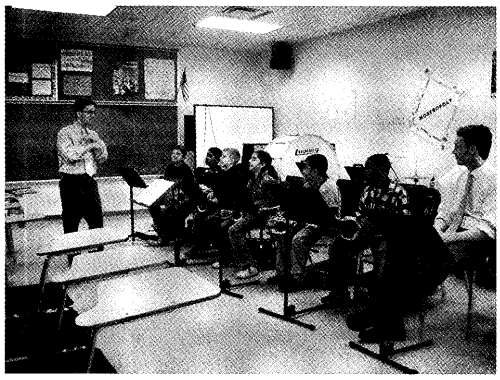


写真１　サキソフォーンの授業

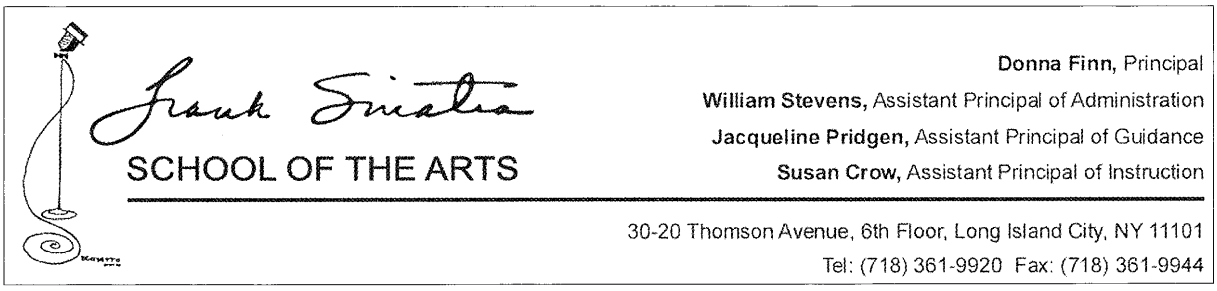
表1　Mosera先生の時間割

	1	2	3	4	5	6	7
	8:20-9:10	9:15-10:05	10:10-11:00	11:05-11:55	12:00-12:50	12:55-13:45	13:50-14-40
Monday	Flutes Beginner	Clarinet Beginner	4-338 (Yovino)	P	L	3-313 (Aslanis)	Brass
Tuesday	Fl.Cl.Sax Advanced	Saxes Beginner	3-322 (Liolin)	5-302 (Kyriakopoulos)	L	Drums Bigi.&Adv.	P
Wednesday	Clarinet Beginner	Brass Beginner	3-316 (Delakas)	Saxes Beginner	L	5-332 (Papadimi)	P
Thursday	P	Flutes Beginner	4-346 (Mehelakes)	5-332 (Papadimi)	L	1-253 (Raia)	5-302 (Kyriakopoulos)
Friday	P	Drums Bigi.&Adv.	4-339 (Zervas)	L	3-326 (Riconda)	Advanced Band	5-300 (Capous)

2）フランク・シナトラ芸術学校（Frank Sinatra School of the Arts）

フランク・シナトラ芸術学校は2001年にニューヨーク市クィーンズ地区に開校した、芸術における公立マグネットスクールである。フィン校長先生（Ms. Donna Fin, Principal）によると、生徒はクィーンズ地区在住第8学年の生徒から学業成績とオーディションにより選抜され、毎年2000名ほどが受験し150名ほどが合格すると言うことであった。現在、第9学年から第12学年までの約600名が在籍している。内容は芸術系の5コース（舞踊・器楽・美術・演劇・声楽）に分かれている。音楽専門授業の概要は以下の通りである。

Music Department Flow Chart



9th Grade

Musicianship I & II

Vocal Technique and Instrumental Ensemble Classes

10th Grade

Theory III & IV

Vocal Technique and Instrumental Ensemble Classes

11th Grade

Keyboard I & II

Vocal Technique and Instrumental Ensemble Classes

12th Grade

Keyboard III & IV

Vocal Technique and Instrumental Ensemble Classes

Vocal Music Ensembles - Concert Choir

Chorale (Teacher Recommendation)
Women's Ensemble (Teacher Recommendation)
Opera Workshop (Teacher Recommendation)
Chamber Singers (Teacher Recommendation)
Musical Theatre (Audition Required)

Instrumental Ensembles - Beginning Orchestra

Symphony Orchestra (Teacher Recommendation)
String Ensembles (Teacher Recommendation)
Concert Band
Wind Ensemble (Teacher Recommendation)
Chamber Groups (Teacher Recommendation)
Musical Pit Orchestra (Teacher Recommendation)
Jazz Ensemble (Audition Required)

生徒は各自が選択したコースの専門授業を週に５～８時間程度受講することになっており、各自の専門性を磨くことが出来る。進学においてはフィン校長先生によると、芸術系に進学する生徒は２０％程度でその他は医学系などに進学するとのことであった。写真２はオーケストラクラス、写真３はバンドクラスである。いずれも授業として実施され、生徒は自分の専門楽器を生き生きと演奏していた。オーケストラを指導していたのはリバーソン（Mr. Ken Lieberson）先生で、2004年にクィーンズ地区のミドルスクールを訪問した際の音楽（器楽）担当教諭であった。この芸術学校は地区の優秀な教員が集められており、リバーソン先生はその一人であったことが理解出来る。フィン校長先生は、フランク・シナトラ芸術学校における教育とは、基礎的知識の上に興味あることを積み上げることであり、オーディションにより、早期に才能を発見してこれを組織的に教育することである

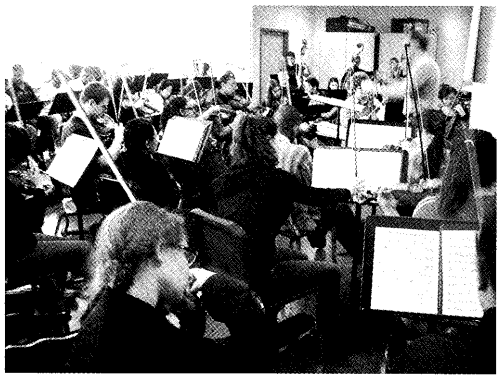


写真２　オーケストラクラス

写真３　バンドクラス

と話されたことが印象的であった。これは米国における音楽の考え方が教科としての「学力観」を基礎に置いており、全米芸術教育標準もこの考え方に由来していると考えられる。日本における音楽教科教育の考え方は、小学校学習指導要領音楽編の観点に提示される「…音楽を愛好する心情と感性を育て…」等の文章に見られるように、児童生徒が音楽との関係を主観的に捉え、児童生徒の音楽との情緒的関わり方を基に、心情や感性の形成を指導しようとする考え方である。一方米国では、音楽を教科として客観的に捉え、音楽の概念的把握と音楽における形式や様式の理解を中心とした系統性のある学問として、児童生徒を評価しようとする側面が強いことを示唆している。またそれに伴い、音楽を表現するパフォーマンス性を重視していることも特徴的である。

写真５　リバーソン先生

写真４　フィン校長

米国における管楽器教育は、児童生徒が楽器に触れ、演奏のための技能を習得することにより、楽器を演奏することの楽しさを体験する姿が印象的である。音楽が子どもたちの個性を伸張する教科であるとするならば、楽器を演奏することは自分の思いを表現し、音楽的能力と音楽的感受性を発露することであると考える。この点において米国で実践されている管楽器教育は、音楽教育上重要であり、日本の音楽授業実践において取り入れることは価値あることであると考える。

さらに米国の音楽教科の特徴として上げられる点は、全米芸術教育標準における内容標準＃８に示される。「音楽と他の芸術、芸術外の教科との関連性を理解する」である。これは、教科としての関連性を芸術だけでなく他教科や文化との関連を見いだすことを要求している。日本でも総合的学習で教科の枠を超え試みているが、さらに明確に他教科との関連性を打ち出すことにより、児童が学習への興味を多方面に向けることが期待出来る。音楽教科は芸術としての歴史的資源が豊富であり、芸術相互の関連性はもちろん、他教科との連携が取りやすい教科であると考えられる。

３　鹿児島市立田上小学校の管楽器導入授業実践事例

鹿児島県の小学校における音楽授業における器楽分野では、全ての児童が小学校を修了

するまでに触れることの出来る楽器が少ないという実態がある。音楽授業における主要な楽器はリコーダーや鍵盤ハーモニカであり、これらは教育楽器（註6）としては価値あるものである。しかし音楽の専門家として、その楽器を演奏する人材を育成出来るかというと難しい。このように教育現場で児童が努力してその教育楽器が上達しても、成長するにつれて忘れられる存在である。音楽は学習指導要領音楽編の観点（イ）で示されているように「児童生徒が楽しく音楽にかかわり、音楽活動の喜びを得るとともに、生活を明るく豊かにし生涯にわたって音楽に親しむことを促すことを重視…」とある。この「生涯にわたって音楽に親しむ」ことが出来るようにするには、器楽分野においてどのような音楽授業が必要なのだろうか。またその後に続く観点（イ）は、「各学校が創意工夫を生かし、児童生徒一人一人が個性的、創造的な学習活動をより活発に行うことが出来るようにする。」とある。「各学校が創意工夫を生かし」、児童生徒のための「個性的、創造的」器楽授業とは表現分野においては、どのような音楽授業なのだろうか。今回はその一つの試行として、筆者と鹿児島市立田上小学校の福留健之教諭が管楽器導入による音楽授業研究の実践を模索してみることにした。

1）田上小学校について

鹿児島市立田上小学校は明治９年（1876年）に西郷隆盛が「田上小学」と揮毫し、開校した歴史ある小学校である。大正３年（1914年）に鹿児島県師範学校の代用付属として契約し、現在に至るまで鹿児島大学教育学部代用附属小学校として存在している。学校経営方針として『人間尊重の精神に立ち，地域や学校の特性を生かし，確かな学力や豊かな人間性，健康や体力などの「生きる力」を備えた，心身共にたくましい田上の子どもを育成する。』を掲げている。また、「職員が研鑽錬磨する伝統的気風を継承し，教育理論の探求と教育実践の深化に不断の努力を続ける。」「代用附属校としての使命を自覚し，その責任遂行に努める。」も方針とし、毎年５月には研究公開を行うなど、職員研修への意識も高い。その他の努力する事項として「ＰＴＡ，校区民との協力態勢を緊密にし，連携して田上の教育を推進していく。」～「行きたい学校，帰りたい家庭，住みたい地域」～を掲げ、地域と共に児童を育成している。全校児童数は2007年４月現在、以下の通りであり、鹿児島市地域では中規模校である。（註7）

学　年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	あさひ子	合　計
児童数	92	93	86	95	86	103	10	565
学級数	4	4	3	3	3	3	2	22

2）鹿児島市立田上小学校の管楽器導入授業の実践事例

平成19年10月実施

授業者：田上小学校　福留健之教諭

児　童：田上小学校　３年１組30名（男子16名・女子14名）

児童の実態：

本学級の子どもたちは、多くの子どもたちが音楽に関心興味を持っており、授業以

外においても歌ったり楽器を演奏したりする姿がよく見られる。また、半分以上の子どもが「実際に演奏する方が楽しい」と答えており、演奏活動に対する意欲の高さが伺える。しかし学校外で開催される演奏会等にいったことがある子どもは1名しかおらず、生の音楽や楽器に触れる機会が少ないことがわかる。また、知っている楽器を尋ねたところ、22名が打楽器の名前を答え、8名が「トランペット」、「ラッパ」のみを答えた。このように子どもたちの中では、管楽器が身近な存在ではないことがわかる。

そこで、子どもたちの興味・関心を高めるために管楽器に触れさせ、実際に楽器を吹かせてみる活動を行うことにした。

（1）題　材

「いろいろな音のちがいをかんじとり、かんがっきをすきになろう」

（2）目　標

「管楽器による（管楽器が含まれる音楽）を鑑賞してみよう」

「管楽器の実物を間近で見たり触ったりしてみよう」

「楽器の音色の美しさを感じ取り、響きの違いや特徴を感じ取ってみよう」

「楽器のイメージにあった表現の仕方を工夫してみよう」

・子どもたちが管楽器のよさや楽しさ音色の美しさを感じ取り、より深く音楽の良さを実感出来るような「管楽器との楽しい出会い」が出来る。

・子どもたちが自ら管楽器に触れる直接的な触れ合いと、吹奏楽や金管バンドで日常的に管楽器を演奏している子どもの演奏を聴いて話し合ったりするなどの間接的な触れ合いを持つ。

（3）教　材

「おかしのすきな まほう使い」	秋葉てる代／作曲	大熊崇子／作詞
「茶つみ」（第1時主教材）	文部省唱歌	
「トランペット吹きの休日」	アンダーソン／作曲	
「バイエルン ポルカ」	ローマン／作曲	
「かりうどの合唱」	ウェーバー／作曲	

（4）題材について

本題材では音に対する豊かな感性を育てるために、様々な金管楽器における音色の違いをを感じ取り、子どもたちのイメージを音で表現するという創造的な活動を中心に学習を進めていくことをねらいとする。

第1時では、既習教材である「茶つみ」を取り上げる。第1時ではトランペット、ホルン、トロンボーンで演奏されている「茶つみ」を鑑賞し、その音色を聞き比べる。また、楽器固有の音色を活かした音楽を鑑賞することもねらいとする。4年次では木管楽器について学習するので、紹介する楽器に木管楽器も含めて管楽器には様々な種類があることを理解させる。

第2時では、実際にコルネットに触れ、子どもたちの興味・関心を引き出したい。また、子どもたちの興味・関心を保つ工夫をしながらマウスピースで音を出してみる。

第３時では、それまでの金管楽器に対する知識をさらに深め、それぞれが選択した金管楽器を練習し、金管楽器に対する親しみを増す工夫をする。このことにより普段の生活において積極的に音楽を感じさせ、音楽あることで生活が明るく豊かになることに気づかせる。そして金管楽器を演奏する楽しさを体感することにより、音楽だけでなくその他の教科に対する興味関心をさらに高める。

（５）展開（第１時）2007年10月５日（金）第２時限目実施

第１時：管楽器による音楽（管楽器が含まれる音楽）を鑑賞し、管楽器の実物を見たり、触ったりしてみよう。

過程	◇主な学習活動　○留意点　＊評価
つかむ	１，ホルンやトロンボーンについて興味を持つ。 ◇それぞれの楽器についてクイズを出す。 ・知っている楽器だよ。吹いてみたいね。学校にもあるね。 ○子どもの興味関心を高める工夫。「おかしのすきな まほう使い」 ＊子どもの言葉でめあてを引き出すことが出来るか。 ２，学習課題を確かめる。 ◇それぞれの楽器で、どのように音色が違うのか聞き比べてみよう。「茶つみ」
見通す	３，楽器の形 ◇それぞれの楽器の違いに気づく。 ・ぐるぐる巻きだよ、カタツムリみたいだね。 ・伸びたり縮んだり、おもしろいね。 ・ボタンみたいなのがあるけれど、何に使うのかな。 ○楽器の特徴を理解させる。 ○どのような音がするのか想像させる。
追求する	４，音を聞き比べる 「トランペット吹きの休日」・「バイエルン ポルカ」・「かりうどの合唱」 ◇楽器ごとの演奏を聴いてみる。 ・似たような感じがするね。これはすぐわかるよ。 ・音が柔らかい感じがするね。こっちの音ははっきり聞こえるよ。 ○楽器の演奏を聴き、その楽器固有の音色を感じ取る。 ○アンサンブルを聴き、響きの広がりを感じ取る。 ○音色の違いを感じ取れている児童には金管アンサンブルの響きを想像させる。 ○音色の違いがよくわからない児童には一つの楽器の音色に集中させる。 ＊金管楽器の音色に興味を持ち、その違いや美しさを味わって聞くことが出来る。 ５，気づいた点を発表する。

	◇気づいた点を発表し合う。 ・ぼくも同じように聞こえたよ。わたしはこんなふうに思ったわ。 ・どうやって音が出るのかな。
みがきあう	6，実際の楽器にふれてみる。 ・想像より重いよ。堅いよ。どこを持つのかな。 ・別の楽器も吹いてみたいね。おもしろいな。 ○音が出る仕組みについて説明し、金管楽器発音の共通点に気付く。 ○トランペット、ホルン、トロンボーン以外の金管楽器についても説明し、楽器への興味関心を高め、楽器の知識を深める。
ふりかえる	7，本字の学習を振り返り、これからの学習に興味を持たせる。 ○音色の違いに気づけたことを賞賛し、音楽によって生活が豊かになることを気づかせる。 ・楽器の大きさによって音の高さが違うんだね。 ・トランペットは華やかな音がしたよ。 ・ホルン、トロンボーンは柔らかな音がするよ。 ○金管楽器の中に木管楽器も混ぜてその違いを示し、今後の学習意欲を高める。 ・クラリネットはみたことがあるよ。 ・サキソフォーンはぴかぴかしてるのに金管楽器ではないのかな。

展開第1時では、まずトランペット・ホルン・トロンボーンを児童に見せ、金管楽器を手に取ることにより、身近な楽器として認識することをねらいとすることから始める。さらに金管楽器や木管楽器の音色を鑑賞することにより楽器への興味・関心を高める工夫をする。その興味・関心を楽器の構造の知識や演奏することに向かわせることを第1時のめあてとした。(註8)

（6）展開（第2時）2007年10月17日（水）第5時限実施

第2時：管楽器の実物を見たり触ったりし、実際に音を出してみよう。

過程	◇主な学習活動　○留意点　＊評価
つかむ	1，これまでの学習を振り返る。 ◇コルネットを見て、触れて、音をイメージしてみる。 ・どうやって楽器は持つのかな。 ○楽器の扱いについて指導する。 ＊全員が楽器保持の重要性について理解し、正しい保持姿勢が出来ているか。

見通す	2，コルネットで音を出す準備（1） ◇マウスピースで音を出す。 ○クラスの金管楽器経験者に演奏させる。マウスピースについて説明する。 ・クラスの友だちの演奏を聴いてみよう。・どうやって音が出るのかな。 ・マウスピースで音を出してみよう。 ＊正しい持ち方でマウスピースだけで発音が出来ているか。
追求する	3，コルネットで音を出す準備（2） ◇グループに分けてマウスピースだけの音出し。 ○金管楽器経験者を中心にグループを分け、マウスピースだけで音を出してみる。 ・どうやったらマウスピースで音が出るのかな。 ・楽器経験者は皆さんに親切に教えてください。 ＊全員が興味関心を持って発音練習に取り組んでいるか。 4，コルネットで音を出す準備（3） ◇実音Ｆをマウスピースだけで出してみる。 ○発音しやすい音であるＦ（上１点ホ）をキーボードの音に合わせて出してみる。 ・少し音が出るようになったかな。 ・今から聞こえてくる音をマウスピースで出してみよう。（Ｆ） ○音が出にくい児童はＢ♭（下１点変ロ）を出してみる。 ・音が出にくい人はこの音を出してみよう。 ・音が出るまで少し練習してみよう。 ＊全員がＢ♭音を発音できているか。
みがきあう	5，コルネットで音を出す。（1） ◇それぞれの金管楽器を持ってみる。 ○楽器の保持、身体の姿勢に注意し、慎重に楽器を持ってみる。 ・さあそれでは楽器を持ってみよう。 ・楽器はマウスピースに合った楽器を持ってみよう。 ・楽器経験者の人の持ち方や体の姿勢をまねてみよう。 ＊コルネットの保持姿勢は正しいか。 6，コルネットで音を出す。（2）＊次時 ○楽器にマウスピースを付けて音を出してみる。 ・楽器の持ち方がわかったら、マウスピースを付けてキーボードに合わせて音（上１点Ｆ）を出してみよう。 ・音が出ない人は、無理をしないで息だけを出してみよう。 ・今度は別な音（下１点Ｂ♭）を出してみよう。 ○楽器の運指（Ｆ－Ｅ♭－Ｄ－Ｃ－Ｂ♭）を教える、練習してみる

	・今からそれぞれの楽器の指使い（運指）を言いますから、覚えてみよう。 ・各グループ経験者の人は、友だちの指使いを確かめてみよう。 ・ＦからＢ♭までの音を練習してみよう。
ふりかえる	７，マウスピースで音を出す ・コルネットの演奏はおもしろかったね。 ・次の時間は曲が吹けるといいね。 ＊クラスの児童が意欲を持って取り組みことが出来たか。 ＊めあての達成はどの程度出来たか。

展開第２時では、まずマウスピースのみの練習を実施する。指導者がマウスピースでの模範演奏を実施し、その後児童が模倣する形で練習を実施する。児童がマウスピースの練習をする際には、児童を４～５人の小グループに分けて各児童相互に発音ができているかチェックさせる。このグループは、楽器の種類ごとに分けることが肝要であり、そのことにより口径が同じ楽器での発音に対する知識や疑問を児童相互で工夫し、解決に導くことを期待することが出来る。児童が発音する音は、マウスピースではもっとも発音しやすいと思われる。Ｆ（上１点ホ）を目標に練習する。トランペットやコルネット、ホルンではうまく発音できても、口径の大きいトロンボーン、ユーフォニアム、チューバでは難しいと思われる場合は、完全５度下のＢ♭（変ロ）を目標とする。この２音はＢ♭管である金管楽器では解放音であり管長が最も短く発音しやすいのである。さらに楽器保持について最も児童に負担が少なく、楽器保持の姿勢を指導しやすい。その後は各児童の進捗状況に合わせて、ＦからＢ♭へ長音階下行形を練習する。練習には運指を記憶する必要があるが、変ロ長調の五音のみであるから、黒板等に提示することで対応出来る。なぜ音階の下行形が適当であるかは、アンブシュアと息のスピードを緩やかにしていくためであり、Ｆが発音出来ると完全５度下のＢ♭まで楽に演奏出来るためである。このことにより金管楽器の発音に対するイメージを心理的に楽にし、金管楽器演奏に対する達成感や喜びが生まれることが期待できる。

○ 授業の流れ

授業の振り返りの後、まず授業者である福留先生の指導でマウスピースだけの発音練習を実施した。「マウスピースでおとをだしてみよう」という指導で、経験者を交えた７グループにクラスを分けてマウスピースのみの音出しが始まった。「何の音でもよいから出してみよう」という指導であったが、全ての児童がすぐに発音できたことは福留先生と共に驚きであった。要因としては児童の唇が柔らかいことが推量されるが、何よりも児童が楽器演奏に対する興味関心が大変高かったことがより効果的であったと考える。福留先生はＦ（上１点ホ）の発音が難しいのではないかと推量したが、ほとんど全ての児童がマウスピースを保持した時点でＦを発音していたことは、予想外

であったとしている。従ってＢ♭（変ロ）を練習することなくスムーズに「チューリップ」のフレーズに移行した。

本時めあてである「金管楽器（コルネット）で音を出す」では、「チューリップ」の旋律を練習した。まず金管バンドの経験者にマウスピースのみでの旋律を演奏させ、全体で発音を練習した。この部分では発音をコントロール出来ない児童もいたが、全体的にはすぐに発音出来ていたようである。その後楽器で旋律を演奏し、ピストンの役割で音程が変化していることを理解した。指導案では、各児童が実際に楽器を手に取り、発音することが出来るまでを計画したが、本時はここで時間になった。

本時ではマウスピースだけの発音体験であったが、児童は大変楽しく授業を受けていた。福留先生によると、普段の音楽授業ではあまり興味を示さない児童にも関心の高さを感じたと感想を述べている。また児童が短時間でマウスピースの発音したことが大変興味深い。ねらいの一つである、「楽器に興味を持つ」から「音楽が好きになる」ことの可能性を予見出来た時間であった。

写真５　グループごとの練習

写真６　ピストンの役割

（７）展開（第３時）2007年10月19日（金）第５時限目実施

第３時：管楽器を吹いて音を出したり、演奏してみよう。

過程	◇主な学習活動　○留意点　＊評価
つかむ	１，これまでの学習を振り返る。 ◇コルネットの持ち方と音の出し方を復習する。 ○楽器を大切に扱うことを注意する。 ・楽器の持ち方を思い出してみよう。 ・自分の楽器を持ち、マウスピースを付けて音を出してみよう。 ・まず、ド（Ｂ♭）を出してみよう。 ・ミーレードの音階を練習してみよう。 ＊楽器保持の姿勢、発音は正しいか。

見通す	2，コルネットを練習する。（1） ◇２～３名の各楽器ごとの小グループに分かれて音を確認する。 ○一人あたりの音出し時間を確保するために小グループに分かれて練習する ・それではそれぞれの楽器ごとに分かれて音階を練習してみよう。 ・音階の中でどの音が難しいかな。なぜ難しいかな。 ○各グループを巡回し、音出しを確認する。 ・質問があれば、先生が回った時に質問してください。 ・音階が演奏出来たグループは手をあげて教えてください。 ・少し練習する時間を取ります。 ＊児童は意欲を持って取り組んでいたか。 ＊発音練習は助け合って努力していたか。
追求する	3，コルネットを練習する。（2） ◇演奏可能なグループごとに音階を演奏してもらう。 ○演奏について努力を賞賛し、次の演奏への動機付けにする。 ・よく吹けたね。うまく吹けたね。この演奏をまねしてみよう。音がいいね。 ・それでは、全員で音階を練習してみよう。 ＊児童は演奏者に対し関心を持って観察していたか。
みがきあう	4，コルネットを練習する。（3） ◇「チューリップ」（B dur）の前半２小節を練習してみる。 ○前半２小節はB♭管ではドレミの３音だけで演奏出来るので、練習してみる。 ・メロディーを覚えて演奏してみよう。 ・各グループで演奏できたら手をあげて教えてください。 ○演奏できたグループを賞賛し、演奏を発表させる。 ・よく演奏できたね。それでは全員で「チューリップ」を演奏してみよう。 5，コルネットで曲を練習してみる。 ◇「チューリップ」の２小節を練習し、演奏できたら発表させる。 ○演奏について賞賛し、短期間で曲が演奏できた努力を言及する。 ・よくできたね。短い間によく頑張ったね。 ＊児童の演奏に対する達成度は高かったか。
	6，金管楽器についてまとめる。 ◇コルネットの魅力について体感したことを発表させる。 ○金管楽器に興味・関心を持つだけでなく、演奏には様々な知識や努力が必要であることを体感する。 ・コルネットの何がおもしろかったかな。

ふりかえる	・楽器をうまくなるためには練習が必要だね。 ・練習にはいろいろな工夫が必要だね。 ・音楽には歌ったり、演奏したり、聴いたりいろいろなやり方があるね。 ・もっと音楽を楽しむためには、知識がいるね。 ・これからもいろいろな楽器に親しもう。 ＊児童は、今回の授業に対する興味や関心を最後まで維持することが出来たか。

展開第３時では、実際に楽器を演奏することから始める。その際には「チューリップ」などの簡単で短い曲を選択し、演奏させる。その際には出来るだけ楽譜を準備し、音をイメージさせることにより、ソルフェージュ能力の訓練も期待できそうである。また、短時間で演奏が可能になることにより、金管楽器へのさらなる興味・関心が高まることも予想出来る。音楽授業での取り扱いは以上であるが、この興味・関心が持続する児童は今後も継続して楽器演奏に取り組むことを期待することが出来る。

○授業の流れ

前回の授業ではマウスピースでの音出しを体験したが、今回は実際に楽器を演奏することをめあてとして「コルネットをふいてみよう」を主題に授業を実施した。まず、導入として全員でマウスピースでの音出しを実施する。まず「楽しく吹くこと」を福留先生が話し、マウスピース保持について指導があった。アンブシュアや呼吸法より楽しく吹くことを指示することにより、児童の興味・関心を持続させる工夫があった。Ｂ♭－Ｃ－Ｄ音の練習であったが、児童はマウスピースのみでは前回同様にしっかり音出しが出来ていた。

その後楽器を使用する発音練習になった。今回はコルネットを使用しているが、楽器数が16台であり、全員が同時に発音練習が出来なかった。今後の見通しとして、コルネットの発音練習の後、アルトホルン・トロンボーン・ユーフォニアム・テューバ等の楽器を使用する授業が実現出来ると、授業機材の問題が解決出来る。コルネットの練習は二人一組で実施された。福留先生は指使いを黒板に図示し、「チューリップ」のフレーズである、Ｂ♭－Ｃ－Ｄ音の練習を指示した。児童は二人一組のグループになり、互いに音を聞いたり、アドヴァイスをしたりしながら発音練習を進めるがマウスピースでの発音練習と異なり、コルネットを演奏する際はより息の抵抗があるのでしっかりとスピードのある息を吹き込む必要がある、このために児童は発音が難しそうである。しかし児童の集中力は衰えず、意欲的に挑戦していた。福留先生が巡回しながら10分ほど練習し、希望者が演奏をすることになったがクラス児童のほとんどが手を挙げて演奏を希望するなど、児童は依然として意欲的であった。コルネットでの演奏はなかなか難しく、Ｂ♭－Ｃ－Ｄ音（ドレミ）の練習で時間がきてしまったが、児童は楽しく授業を受けていたようである。課題として授業時間の中でいかに効果的に指導が出来るか工夫することが必要である。今回の授業では、30名の児童が同時に個人練習をすると、授業時間内では個々の指導が行いにくいことが感じられた。また

楽器の持ち方や呼吸法に触れる時間も必要であり、少数の児童は最後まで楽器保持に苦労していた。楽器の取り扱いについても金管楽器は材質が柔らかく簡単に傷が付くことなど、指導して行く必要を感じた。さらに楽器の後始末についても時間がかかり、授業時間内でこれらを常に指導していかねばならない。

今回授業では、これらの改善点はあるが、児童は大変積極的に授業を受けており、最後までよく指示を守り興味・関心、集中力を維持出来ていた。児童の感想として楽器の練習は難しいという感想が多く聞かれた。今回初めてコルネットに触れて期待を込めて練習してみたが、思うように音が出なかったと言うことである。しかし、初心者の児童が楽器に触れた時間は実質的に３０分程度であり、しかも二人に１台では今回の授業中にはこれが限度であろう。福留先生も今回の研究で今後の授業に手応えを感じている。来年度以降は今回の研究成果を基に、さらに進化した授業を研究する必要性を感じた。

写真７　コルネット演奏指導１

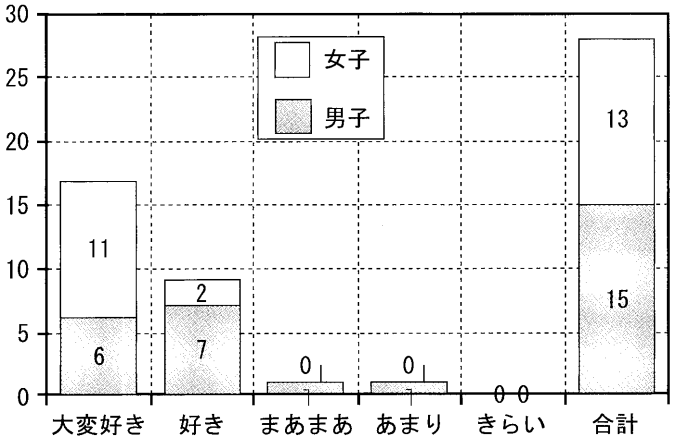
写真８　コルネット演奏指導２

３）授業前・授業後アンケート

（１）授業前アンケート設問と結果

研究授業に先立ち、対象クラスである３年１組に音楽授業についてのアンケートを実施した。アンケートについては、今後についての予見や推量をさけるために予告なしに実施し、児童には今の気持ちを素直に記入してほしいことを話した。クラス人数は男子16名、女子14名の30名である。授業前アンケート回収数は男子15名、女子13名の28名であった。授業後アンケー

表１　音楽の授業は好きですか



ト回収数は男子16名、女子13名の29名であった。

①音楽の授業は好きですか。

設問①においては、音楽全体の印象を尋ねたが、男女児童が「大変好き」17名（60.7%）または「好き」9名（32.1%）を選択している。男子では「好き」が7名（46.7%）で最も多く、「まあまあ」・「あまり好きではない」をそれぞれ1名が選択した。女子では13名中11名（84.6%）が「大変好き」と答えており、女子児童が男子児童より音楽教科に対して意欲を感じ取れる。

②「①」で答えた理由は、どうしてですか。

男　子
◇大変好き ・ピアノを習っているから。簡単だから。　・楽器で演奏するのが好きだから。 ・きれいな音楽が聴けるから。楽しいから。　・弾いたり、歌うのが楽しい。 ・歌を歌うことやリコーダーを吹くのがとても楽しいです。 ・いろんな楽器を鳴らしたりするのが好きだから。
◇好き ・歌うのが好き。　・リコーダーの音で曲が作れるから。 ・いろいろな音を「おしゃれの好きなまほう使い」で使うから。 ・楽器を鳴らすのが大好きだから。　・楽しいから。・いろいろな楽器が分かるから。
◇まあまあ ・音を創るのが好きで、演奏や歌がいやです。
◇あまり好きではない ・歌ったりするのが苦手なのであまり好きではない。
女　子
◇大変好き ・楽しいから。・歌ったりするから。・楽器が好き、金管バンドも習っているから。 ・リコーダーを吹いたり、歌を歌ったりすることが大好き。 ・楽器で演奏したりするから大好き。　・楽器の音や歌が好きだから。 ・音を創ったり、音を組み合わせたりするのが好き。 ・ピアノとかリコーダーとかも大好きだから。　・音楽を聴いたりするから。 ・金管バンドをしていて楽しいから。楽器が好きだから。
◇好き ・音楽の授業は好きだけど、歌うのが嫌いです。　・歌うときとかは楽しいから。

設問②では児童の音楽教科に対するイメージを記入させた。男女ともにほとんどの児

童は歌や演奏などの表現領域が楽しいと記入し、鑑賞領域が楽しいと記入したのは男子児童に1名であった。これにより、児童は歌唱や楽器演奏という動的な音楽領域である表現領域を音楽に望んでいることが分かる。音楽授業においては、全ての分野をバランス取りながら指導していくことが必要である。今後小学校では、静的な音楽領域である鑑賞領域授業をさらに工夫していく必要が感じ取れる。

③音楽の授業で何が面白いですか。＊重複回答有り。

設問③では、表現領域の中で児童は、歌唱より楽器を使用した授業に対して意欲を示していることが感じ取れる。作音楽器を使用する歌唱授業より、容易に音を出せる楽器を使用した器楽授業が楽しく感じていることは、声が発達途上であることを考えると当然であろう。ただし、歌唱については前項②でも既にマイナスのイメージを感じる児童が存在するのは、今後の課題である。

	歌	器楽	その他面白いこと
男　子	4	11	リコーダー・音作り
女　子	6	12	グループ発表・音作り

④器楽では何が面白いと思いますか。

男　子
◇面白いもの リコーダーを吹くこと（3）・木琴（1）・鉄琴（5）・太鼓（4）・マラカス（1） タンバリン（1）
女　子
◇面白いもの リコーダーを吹くこと（5）・トライアングル（1）・鉄琴（3）・木琴（3） ピアノ（2）・グループでの音作り（1）

＊「面白いものは無い」の回答欄も設定したが回答は0であった。

設問④は、音楽授業では比較的児童の興味や関心が高い、器楽授業の面白さをイメージしてもらった。児童はリコーダーを除き打楽器を回答しており、最初は簡単に音が出る打楽器を面白いと感じている。やはり楽器に対しては、児童自身が実際に体験した楽器だけで判断している。児童はこの乏しい楽器体験を豊かにするためにも、今後において金管楽器の授業に魅力を感じてほしいものである。

⑤金管楽器を吹いてみたいと思いますか。

	思　う	思わない	吹いてみたい楽器
男　子	11	4	トランペット（7）・ホルン（1）・トロンボーン（1） チューバ（1）
女　子	12	1	トランペット（9）・ホルン（3）・トロンボーン（5） ユーフォニアム（1）・チューバ（1）

この設問⑤では、金管楽器に興味・関心があるかを答えてもらったが、大半の児童23名（82.1%）が演奏に興味を持っているようである。男子15名中4名（26.8%）が興味

を示さないが、今回のコルネットだけでなく他の金管楽器を導入した際に、今後どのように変化するか興味がある。吹いてみたい楽器はトランペットが多いが、女子にバンド経験者がいるためか、より金管楽器の選択肢が多い。

⑥金管楽器は難しいと思いますか。

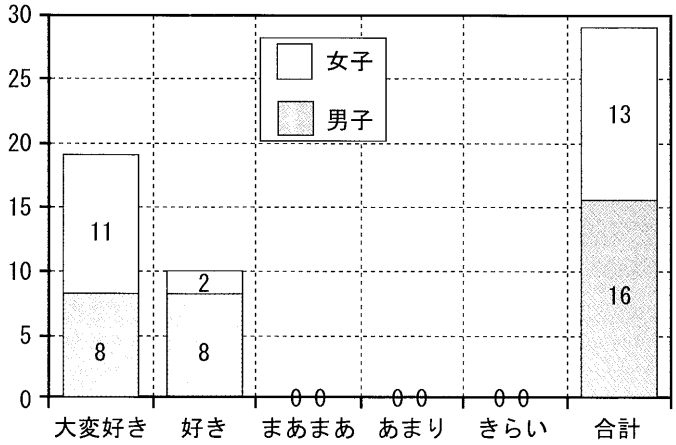
	思う	思わない	わからない
男　子	11	1	3
女　子	9	2	2

設問⑥では、金管楽器について難しいイメージを持っていることが感じ取れる。しかしこれまでのアンケートでは、児童の金管楽器における十分な興味・関心を感じ取ることが出来た。今後の児童への金管楽器授業でこのイメージをよい方向へ導き、音楽全体への興味・関心が高まることを期待したい。

（2）授業後アンケートの設問と結果

このアンケートは2007年10月21日、第5時限終了後に回答したアンケートである。有効回答数は、男子16名、女子13名の合計29名である。

表2　今日の音楽授業は好きですか



①今日の音楽授業は好きですか。

この設問は授業前アンケートと比較して、男子の「まあまあ」「あまり」がそれぞれ1から0に減少し、「大変好き」6名から8名（50%）、「好き」7名から8名（50%）に増加している。授業前アンケートより音楽教科に対するイメージが良くなっている。

②「①」で答えた理由を答えてみましょう。＊重複回答有り。

男　子
◇大変好き ・楽器を弾くのが好き。　・弾いたことの無い楽器が吹けるから。 ・吹くのが楽しかった。　・金管楽器を初めて吹いたから。 ・金管楽器はなかなか吹けないのに吹けたから。 ・金管楽器を吹きたいとずっと思っていたから。　・音楽が得意だから。 ・音楽が好きだから。
◇好き ・いろいろな楽器を弾くから。　・金管楽器を吹くのが楽しい。 ・金管楽器を吹くと唇が痛くなるから。 ・今日コルネットを吹いていてとても楽しかった。まだ吹けてない人も上手でした。 ・いっぱい吹いてみて好きになったから。

女　子
◇大変好き ・楽器を吹いたこと。　・コルネットを吹くことがすごく楽しかったから。 ・いろいろな音を聞いたり出来るから。　・吹くことが大好きだから。 ・コルネットを吹いて難しかったり、吹けてうれしかったりしたから。 ・もともと大好きだから。　・金管バンドをしていて、授業でも吹けたから。 ・きれいな楽器で吹けたから。
◇好き ・金管楽器はほとんど低い音しか出なかったから。 ・今日初めて金管楽器を吹いて、全然吹けなかったけど自分で思ったより吹けたから。

授業前のアンケートでは好きな理由が歌唱・楽器演奏・音創り・鑑賞等に分かれたが、金管楽器の授業後では、男女ともに楽器や金管楽器の演奏が楽しかったことを記入している児童が目立つ。今回の授業が児童にとって印象深い授業であったことが感じられる。

③音楽の授業で何が面白いですか、面白くないですか。　＊重複回答有り。

男　子
◇面白いこと ・楽器を弾くこと。・楽器を吹くこと。・金管楽器の授業。 ・楽器の音を出すところ。・歌うこと・いろいろな楽器を紹介してくれること。 ・聞いたり、吹いたりするところ。・弾いたり吹いたりするすること。
◇面白くないこと ・ピアノを弾くこと。
女　子
◇面白いこと ・歌うこと。　・楽器を鳴らすこと。　・演奏したりすること。 ・コルネットをみんな笑顔で演奏していました。・演奏したりすること。 ・金管楽器を吹いたところ。　・楽器を吹くこと。　・歌うこと。 ・コルネットを吹いたり、歌をみんなで歌ったりしたこと。
◇面白くないこと ・ハーモニカを吹くこと。

この設問③では、コルネット演奏が難しいことを「面白くないこと」として記入することを予想したが、結果的にはコルネットを演奏することを全員が積極的に肯定しており、金管楽器授業への期待があることが分かる。

④金管楽器の授業を受けて、どこが難しかったですか。＊重複回答有り。

男　子
・音を鳴らすこと。　・口を振動させること。　・「チューリップ」を吹くところ。 ・ド以外の音を出すこと。　・指の動かせ方。　・指使い。　・レとミの音が難しい。 ・ベルを上げて吹かなかったから。　・マウスピースで吹くこと。　・難しかった。 ・ボタンを押すこと。　・難しくなかった。
女　子
・指使いを覚えること。　・マウスピースを鳴らせること。　・息の強さ。 ・口をぶるぶるさせること。　・コルネットで吹くこと。　・金管楽器の持ち方。 ・何もなかった。　・コルネットの持ち方。　・全部。　・息であまり吹けなかった。

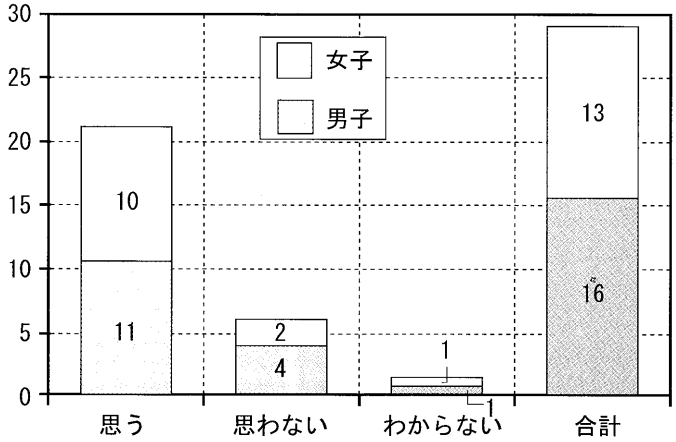
⑤授業を受けて思ったより簡単だったことはありますか。　＊重複回答有り。

男　子
・全部難しかった。　・マウスピースをつけたら簡単だった。 ・マウスピースの吹き方。　・ボタンを押すこと。　・ドレミは簡単だった。 ・指使いが簡単だった。
女　子
・息の出し方。　・指使いが簡単だった。　・指の動き。　・ドレミの指使い。 ・難しかった。　・金管楽器を吹くこと。　・「チューリップ」を吹くこと。 ・曲が簡単だった。

⑥金管楽器は難しいと思いますか。

設問④・⑤・⑥をまとめると、ほとんどの児童がコルネット演奏について難しかったと答えているが、前項の設問①では、全員が今回の授業が「大変好き」または「好き」であり、設問③ではほとんどの児童が音楽の授業で「面白いことがある」と回答している。児童は今回の授業を、演奏することは難しいが、取り組む価値あることとして認識しているようである。

表３　金管楽器の難しさ



設問⑥では、「難しかったと思う」

と回答した児童が女子13名中10名（76.9%）、男子16名中11名（68.8%）であり、経験者を除いて演奏が期待したより難しかったことを示している。しかし、前述の通り時間的に短時間でコルネットを演奏することは困難であり、授業システムを構築していくことにより、楽器演奏の難しさは軽減していくものと思われる。

4）まとめ

○授業実施者である福留建之教諭によるまとめ

成果

・３年生において鑑賞教材との関連を生かしての実践であった。
・金管楽器を演奏することは，３年生にとっては難しい内容だと感じていた。
・マウスピースで音を出す事に関しては，そう難しくないことだと感じた。
・中には初めてにもかかわらず，きれいなアンブシュアで吹ける子どもがいたのには驚いた。
・楽器に対する興味・関心が非常に高くなり，教材化への可能性を感じた。

課題

・少ない時間の中で管楽器を導入していくには，系統立てた計画の必要性を感じた。
・校外講師（ゲストティーチャー）の招聘や教材開発といった，効率よく学習が出来るシステムを今後考えていく必要を感じた。
・日常的に管楽器にふれられる音楽的な環境をつくることで，子どもたちの関心はまだ高まるだろうと思われる。備品（楽器）の充実やメンテナンスについても考えていかなければならない。

今回は米国での管楽器教育における先行事例を提示し、その理論的裏付けが米国芸術教育標準に基づくものであることを考察した。そして日本の学習指導要領において管楽器教育における理論的根拠を提示し、今後の管楽器教育授業の具体的試案を示したところである。

今回の管楽器授業は年間計画においては、音楽教科における他の単元との関連性が限定されていることは否定しない。しかし児童にとって管楽器は、その音色の華やかさと楽器演奏への期待が大変魅力的であることがアンケートから読み取れる。その意味では管楽器導入授業は、音楽授業として児童に音楽へのさらなる興味関心を呼び起こす可能性を秘めている。将来的にはこのような授業に触発され才能を開花し、音楽を専門とする児童が存在することも考えられる。また楽器を演奏することは楽譜を読み、それを自分のイメージとするプロセスが必要である。これは自己の音楽リテラシーを開発することに繋がり、演奏する音楽作品の背景を知識化するプロセスを通して、音楽だけでなく他教科との関連性を広げることが期待出来る。

このように管楽器教育は音楽教育において今後の新しい授業開発に大きな可能性を示している。しかし管楽器教育を授業として導入するためには、素材としての管楽器本体と教材が必要である。このことが授業担当者にとって大きな壁となっている。しかし、

特別活動における既存の金管バンドや吹奏楽の機材や教材、指導法を活用することにより問題解決への糸口が見えるはずである。加えて最近の音楽授業の削減方向はますます授業担当者を時間的余裕がない方向へ押しやり、共通教材を中心とした音楽授業を強いている。このことは児童にとって音楽授業の魅力を失わせていくことに繋がる。また、管楽器を授業に導入するには、授業担当者が管楽器に対する知識が必要であり、このことが管楽器の授業を躊躇する原因にもなっていることは、前回のアンケートにも詳しい。(註1)

これらの問題を解決する方法の一つとしてゲストティーチャーの活用が挙げられる。管楽器のゲストティーチャーを活用することにより、管楽器本来の演奏や正確な演奏法を直接児童が目の当たりにすることが出来る。また最近、鹿児島地区には管楽器演奏を専門にする個人や団体があり、これを活用することにより地域と学校が文化的繋がりを持つことが出来る。管楽器を演奏する音楽家にとっては、職業としての可能性も広がることであろう。予算的な問題があるが、鹿児島県の各学校が組織的に取り組めば解決出来る問題である。鹿児島県内ほとんどの学校が吹奏楽または金管バンドを特別活動として実施しているが、このリソースをぜひ音楽授業として活用して欲しいものである。そして児童が成長すると、コミュニティバンド等の生涯教育としても管楽器教育は大変有効である。このことを考えるならば、小学校時の管楽器教育への取り組みは今後の音楽授業における可能性の広がりを示していると考えてよい。管楽器の演奏が難しいと感じるならば「なぜそうなのか」を考えることが自ら学び、自ら考えることを伸張し、「生きる力」にも繋がるであろう。他の演奏を参考にすることは、音楽を真剣に感受し自己を音楽的に訓練し、他者とのコミュニケーション能力を育む可能性を持っている。今後も研究を進めて音楽授業の可能性を探究して行きたいと考えている。

註

1 南九州地域科学研究所所報第22号（表2）p44
2 新学習指導要領（平成10年12月14日告示）
3 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会・教育課程部会
（第4期第9回・平成19年9月10日開催）
4 宮野モモ子・伊東俊彦 編 小学校新学習指導要領Q＆A～開設と展開～音楽編
教育出版 1999年
5 Music Educators National Conference(http://www.menc.org/publication/books/standards.htm)
が全米の緒芸術団体の意見を具体化し1994年に発表した。
6 初心者が手軽に演奏出来る楽器ではあるが、一般社会において演奏楽器としての認知は低い。その意味では教育現場を中心に活躍する楽器とする。
7 田上小学校ＨＰ (http://keinet.com/tagamis/index.htm)
8 第1時は福留建之教諭の指導により単独で実施された。よって今回はその指導計画のみ提示する。

引用・参考文献

1 音楽のカリキュラムの改善に関する研究－諸外国の動向－」 国立教育政策研究所 2005年
2 秋田賀文 新しい器楽学習の考え方―規制曲の演奏を超えて― セレーノ音楽科教育実践講座 2004年 日本文教社
3 筒石賢昭 諸外国の動向―全米芸術標準の動向をふまえて― セレーノ音楽科教育実践講座 2004年 日本文教社
4 新村元植・福留建之 鹿児島私立小学校における管楽器教育の可能性 南九州地域科学研究所所報 第22号 2006年 鹿児島女子短期大学

（平成19年11月13日 受理）